


 労協連だより

古村 伸宏

様々な門出に合わせたように、桜が満開の時を迎えた。我が家も小学校との関わりが終わりを迎えた。人生の節々で、歩んできた道を思い起こし、感慨にふける一方で、残りの道のことも考える歳になった。春は、出会いと別れが交差する季節。しかも、寒く厳しい冬の時期を越えてやってくるこの季節は、希望や不安の土台となる「やり遂げてきた手ごたえ」の上に訪れる、芽吹きの季節だ。今年はどうなるのか。今は健やかな育ちを支える大地の豊かさに、思いが至る日々だ。

センター事業団の2011年度事業拡大は、純増15億円程度と拡大基調は続いているものの、鈍化傾向を示した。震災を受けて、FEC自給コミュニティの創造をテーマに、仕事おこしを積極的に運動化する1年となったが、まだその実がなるには、時間と栄養を要する。一方で指定管理などの拡大は、一進一退である。そんな中で、東京ではいったん失うことが内定した仕事が、利用者や地域の人々の運動によって劇的に継続する、という成果を生んだ。この評価をしっかり共有しつつ、同時に明らかになった課題を方針化していくことが求められる。総じて、仕事の拡大は構造的な転換期に入った。仕事をおこす取組みが多様化し、何万坪といった遊休地の活用や森林の管理の依頼が相次ぎ、廃校や空き店舗の再活用の企画提案も全国で始まっている。地域の社会資源として存在していた、学校や田畑・森林・店舗といっ

たものが、その価値を失い、放置・廃棄されてきた中で、震災をはじめとする危機に直面する中で、これらの社会資源の見直しが進んでいるのは、必然性があるように思う。FECというテーマは、こうした傾向にもコミットする、社会の再生に不可欠な呼びかけとなりつつある。

今年度の新人事務局員が4月から仲間に加わり、久しぶりに初期研修に関わった。協同労働のことやワーカーズコープの歴史や到達点といった基礎的なことを学ぶ前に、今の社会を覆っている実態に迫る、映画鑑賞や読み合わせを通じて、人間の本质とは何か、社会や経済とは何のためのものか、といった問いかけをしながら2日間を過ごした。これは、基金訓練などで「働くということ」をテーマに組んできたカリキュラムをアレンジしたものだ。今の時代と社会の本質を見抜く力と、人間が本来有している生命の本質を基調とした視点は、これからますます重要性を増す。本質を見据えた仕事おこしという高い水準の協同労働運動を担う存在として、新人には誇りと希望をもって頑張ってもらいたい。

春になると必ず身に染みる言葉がある。「土に根を下ろし、風と共に生きよう。種と共に冬を越え、鳥と共に春をうたおう。」宮崎映画「天空の城ラピュタ」の中で出てくる台詞である。冬の時代のごとき今の社会を超えていくための、そしてその先に思いを馳せ、本質に迫る本物をつくり出す協同労働運動の出番が始まる。